

図書館情報専門学群における情報リテラシー教育の試み

松村 敦*、鈴木佳苗**、三波千穂美**、時井真紀**

図書館情報メディア研究科 *助手、**講師

はじめに

高度情報化社会の到来により、教育の場において情報に関わるための能力の育成が重要な課題となってきた。図書館情報専門学群（以下、本学群）では、2003年度に講義科目「情報基礎」および実習科目「情報基礎実習」を情報リテラシー教育を行う科目として開設し、この課題に対応してきた。ここでは、実習科目「情報基礎実習」について、主に2003年度および2004年度を担当した教員による取り組みを報告したい。

図書館情報専門学群生

具体的な取り組みを紹介する前に、本学群の学生について述べておく。本学群に所属する学生の多くは図書館員を志望して入学してくるが、一方で、SEなどのコンピュータ関連の技術者を目指す学生も多い。また、卒業研究では、システム構築を行う学生もいれば、文学作品の解釈をする学生もいる

というように実に多様である。このように、学生が様々な興味を持って教育を受けているところに本学群（あるいは図書館情報学）の特色があると言えよう。

このような多様な興味を持つ学生に対して教育の効果を上げるには、どのような方法が望ましいのであろうか。これは情報リテラシー教育に限らず、本学群における基礎教育が抱える大きな問題でもある。「情報基礎実習」を担当した教員が行ってきた教育内容の工夫は、この問題への回答を求める一つの試みであると言える。

「情報基礎実習」の開設

本学群の前身である図書館情報大学における情報リテラシー教育は、システム開発などを専門とする教員が担当するUNIX上でのコンピュータ利用技術の修得が主な内容であった。コンピュータ操作に不慣れな学生も多かったが、悲鳴をあげつつ格闘し

ているうちに、UNIXシステムを利用できるようになるものであった。しかし、演習は隔週で実施されるため十分な時間を確保できず、内容もコンピュータ利用の高度な部分に偏るなどの問題もあった。

筑波大学との統合により、本学群としてのカリキュラムが2003年度にスタートし、これを契機に情報リテラシー教育は一新されることになった。「情報基礎実習」の開設である。当時から筑波大学では共通科目「情報処理」が開設されていたが、本学群はこれを採用せず、図書館情報学的な視点から独自の情報リテラシー教育に取り組む道を選択した。

その試みの一つとして、実習担当教員を増やし、様々な専門を持つ教員が参加する体制をとった。これにより、コンピュータの操作に偏りがちであった教育内容を改めることができた。例えば、テクニカルコミュニケーションを専門とする教員の参加で、いわゆるシステムの立場からではなく、ユーザの視点から実習内容を見直すことができた。また、参照文献の書き方といったレポート作成のための常識的教育を、ワープロソフトの使い方という技術の修得と関連付けて教えるなど、課題の意義を確かめながら技術を修得できるようになった。

その他にも、実習項目のうち重要なポイントのチェックを行うことも新たに採用し

た。この方式は学生に目標を与え、学習意欲を向上させることに貢献しただけでなく、各学生がどこでつまづいているかを教員が把握するのに大きく役立った。

技術を修得する意味

初年度の試みは、概ね学生にも好評であったが、多くの反省点も残された。その一つは、学生の学習進度に大きな差が出てしまったことである。2コマの実習のうち1コマで終了してしまう学生がいる一方で、昼休みを潰しても課題が終らない学生が出てしまうといったことが起こった。

しかし、それ以上に問題となったのは、学生に主体的な学習姿勢が見られなかったことである。例えば、Excelの実習ではテキストの例にある現実味のない数値を何も考えずに入力し、平均や分散を機械的に算出する学生が多く見られた。そのような学生は、間違った答えが出ていても全く気付かないのである。このような状況は、各技術を修得する意味、その技術の位置付けが見えていない場合に起こるように感じられた。学生の受講態度に問題があるとする見方もできるが、最大の原因は、こちらが与える課題の設定の仕方にあると思われた。このことを痛切に反省した初年度であった。

主体的な学習のために

2004年度は前年度の反省から、さらにいくつかの改善を試みた。その最も大きなものは、実習課題とレポート課題を連動させ、1学期間連続して1つのテーマに沿って課題を達成する方式としたことと、そのテーマを自分が興味のあることから自由に選んでもらうようにした点である。これは言うまでもなく、学生の主体的な学習姿勢を引き出すことを意図していた。

その効果は目に見えて現れた。まず、選択したテーマで1学期間頑張らなければならないということで、学生はこのテーマの設定に真剣に取り組んでいた。テーマを確定するまでのWebを使って調べる、文章で表現する、といった課題に対する取り組み方が非常に積極的なものとなった。また、テーマを設定した後も、表やグラフ、文章の作成、Webページの構成など、各実習要素に対する積極性が見られた。出来上がった最終レポートのWebページは、実習での技術の修得とともに学生のそのテーマへの思いが溢れてくるような力作揃いとなった。この方式はまた、学生の進度の差を埋めることにもつながった。比較的進度の遅い学生も、実習時間外に積極的に作業を行うようになった。また、課題自体が簡単であっても自分のテーマを掘り下げる分にはいくらかでも時間をかけられるため、実習時間を

持て余す学生は減少した。

その他にもいくつか改善を試みた。例えば、実習項目の難易度について独自のアンケート調査を毎回行うことにより、実習内容の修正をしたり、個々の学生の状態を把握することができるようになった。これも専門の研究でアンケート調査を利用している教員が新しく担当者となったことで実現したものである。また、TAには様々な専門を学んでいる学生を採用した。教員だけでなくTAについても、多様な視点からのサポートを行うためである。その他、学生の学習補助のために、FAQを作成して公開することも試みた。

さらなる発展に向けて

2年間の試行錯誤から得られた成果は2点ある。第1点は、多様な視点を教育する側が持つことにより、多角的な教育と様々な学生への柔軟な対応が可能になった点である。特に、担当を持ち回り制にすることで、教育内容や体制の改善とその成果の蓄積が実現できた。情報リテラシー教育で教えなければならないことの中には、その本質は変わらないとはいえ、技術の進歩とともに次々に新しい側面が現れてくるものがある。そのような変化に対応していくには、常に新しい視点を持ち改善を繰り返していく他はないであろう。2005年度には法律学の教

員を担当に交えて、著作権などの法律関係の内容を盛り込み、学生が注意深く情報と関わっていけるよう配慮した。これは、近年増加している情報に関わる詐欺や権利問題等に対応した形である。今後もこのような改善を続けていくことが重要であると考えている。

第2点は学習意欲維持の方法を確立したことである。学生自らが課題を設定することで、取り組みに積極性が現れてくる。もちろん、好きなことだけやって必要な技術や知識が全て身につくかということ、それはなかなか難しいであろう。しかし、少なくとも好きなことをやっている時には「単位が欲しいから」という以上の動機を学生は持つことができ、その技術の修得に対しても非常に積極的になれることは確かである。

一方で、課題も残されている。1学期間という短い時間で教えることの限界、継続的に技術を利用するための科目間の連携など、改善の余地は多い。また、学生の能力の追跡調査を行ない、教育効果を客観的に評価する必要もある。そして、このような教育を維持するための負担の軽減も重要な課題である。この2年間、各担当者が費やした労力は膨大なものであった。複数の担当者で密にコミュニケーションをとりながら進める必要性から、多くの時間を割くことになった。また、新しい内容を盛り込むにも

多くの作業を必要とした。担当者の労力が大きすぎれば教育効果も十分にあげられなくなる危険性がある。いかに効率良く教育体制を維持するかも含め、これらの課題について取り組んでいく必要がある。

おわりに

高校で「情報」を学習した学生がいよいよ入学してくる。学群再編により図書館情報専門学群は2007年度に新たな学類として編成され、教育を行うことになる。目まぐるしく変わる環境に対応しながら本質を見失わずに常に新しい教育を行なっていくには、非常に多くの労力が必要となる。しかし、そのような努力によって学生が力を獲得していく様子を実感できる実習は、実にやりがいのある科目である。今年度もまた力作ぞろいの最終レポートのWebページを見ながら、今また、彼らからもらったエネルギーを糧にして、次の課題へ挑戦していこうと思っているところである。

(まつむら あつし/情報検索)
(すずき かなえ/社会情報学・社会心理学)
(さんなみ ちほみ/科学技術コミュニケーション)
(ときい まき/計算物理)